

排除／共生を考える

闘争、修復、ソーシャル・デザイン

2022年2月21日（日）

中村寛（多摩美術大学）

y-nakamura@tamabi.ac.jp

はじめに

ニューヨーク市ハーレムでの研究プロジェクト
の背景と大きな問い

- 1) 暴力（人びとのあいだの線引きや人種・民族・宗教・階層の差別、コンフリクト）
- 2) 社会的痛苦
- 3) そうした状況下での取り組みや文化表現

ハーレムの人種・民族構成と地政学的位置

全国

- ・ 19C末～20C初頭 「新移民」
- ・ 1916～1970 「大移動」
- ・ 20C半ばから21C ヒスパニック系移民の急増
- ・ 1990以降 アフリカ、中東、東南アジア移民

市内

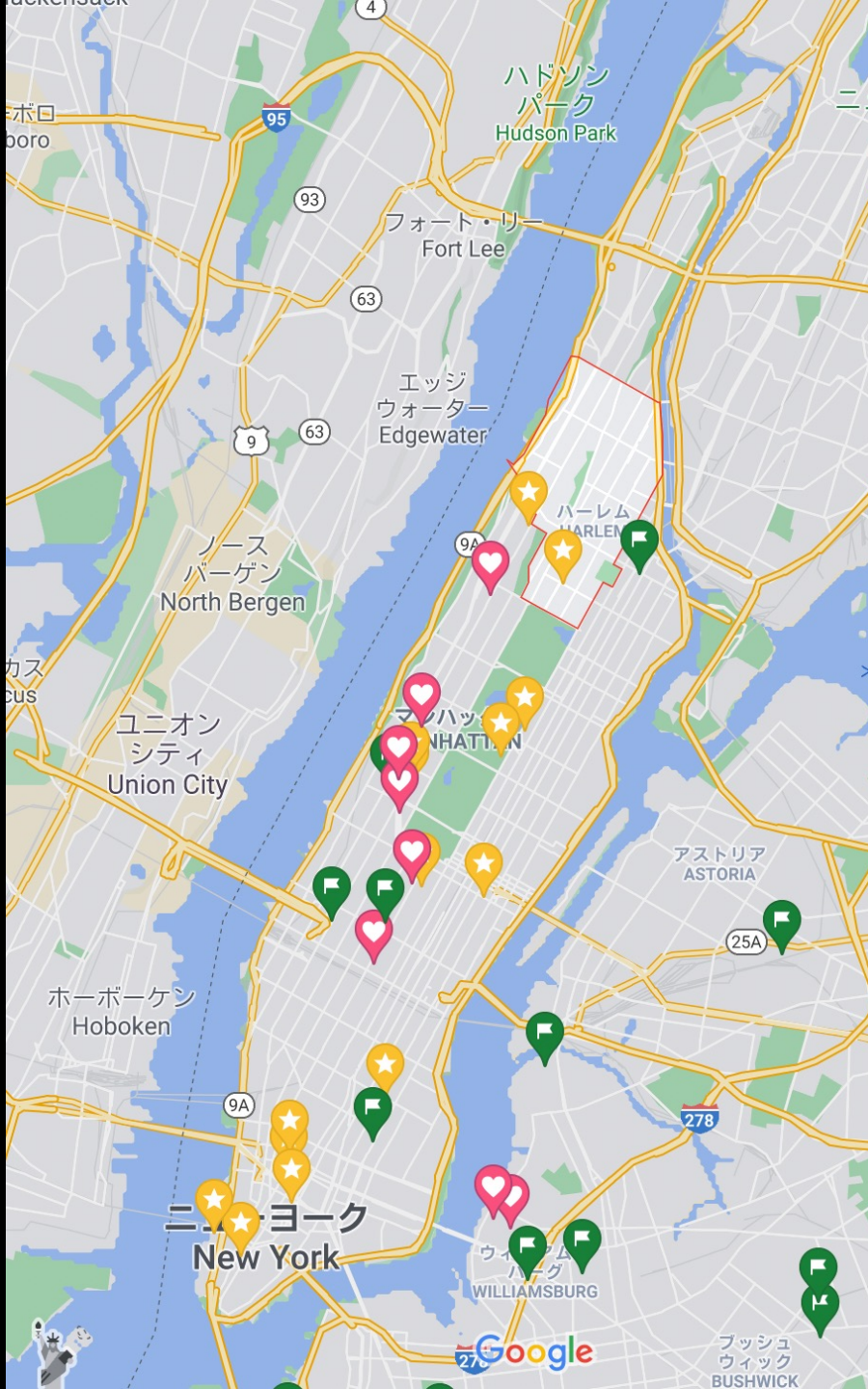
- ・ 1994年～2001年 ジュリアーニ市政
- ・ 再開発とジェントリフィケーション
- ・ 2001年9月11日 「同時多発テロ」
- ・ 2003春 イラク戦争

ハーレムの人種・民族構成と地政学的位置

- ・ハーレムに古くから暮らすアフリカ系アメリカ人
- ・1990年代以降に急増した西アフリカからのニューカマーズ（主にハーレムの新住民やショップ店員として）
- ・同じく90年代以降に顕著になってきた中東および東南アジアからの移民（主にムスリム移民、ストリート・ヴェンダーとして）
- ・ラティーノ（主にボルデガ店員として）
- ・2000年代以降着実に増え続ける白人やアジア人

Cf. Stoller, Paul, *Money Has No Smell: The Africanization of New York City*, Chicago: University of Chicago Press, 2002.

Cf. Osofsky, Gilbert, *Harlem: The Making of a Ghetto (Negro New York, 1890-1930)*, 2nd edition. Chicago: Ivan R. Dee, 1996[1966].



ハドソン
パーク
Hudson Park

フォート・リー
Fort Lee

エッジ
ウォーター
Edgewater

ノース
バーゲン
North Bergen

ユニオン
シティ
Union City

ホーボーケン
Hoboken

ニューヨーク
New York

ハーレム
HARLEM

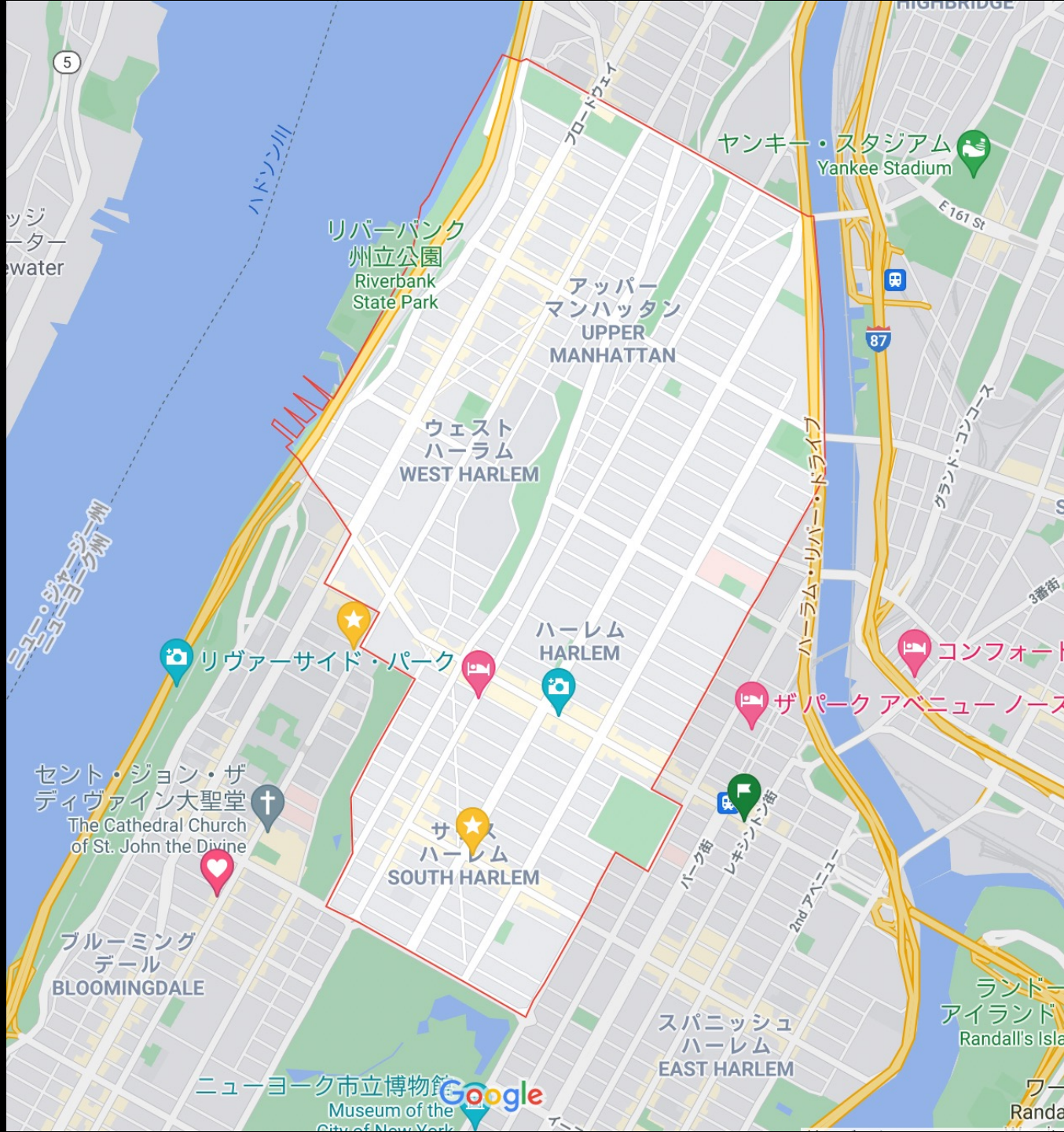
マンハッタン
MANHATTAN

アストリア
ASTORIA

ウィリアムズ
バーグ
WILLIAMSBURG

ブッシュ
ウィック
BUSHWICK





5

リバー
ウォーター
Riverbank
water

ハドソン川

リバーバンク
州立公園
Riverbank
State Park

アップパー
マンハッタン
UPPER
MANHATTAN

ヤンキー・スタジアム
Yankee Stadium

E 161 St

ウェスト
ハーラム
WEST HARLEM

ハーラム・リバー・ドライブ

グランド・コンコース

リバーサイド・パーク

リヴァーサイド・パーク

ハーラム
HARLEM

コンフォート

セント・ジョン・ザ
ディヴァイン大聖堂
The Cathedral Church
of St. John the Divine

サウス
ハーラム
SOUTH HARLEM

ザパークアベニューノース

ブルームिंग
デール
BLOOMINGDALE

パーク街
レキシントン街

2ndアベニュー

ランド
アイランド
Randall's Isla

ニューヨーク市立博物館
Museum of the
City of New York

Google

スパニッシュ
ハーラム
EAST HARLEM

ラン
Randa



<http://newyorkcity2005.webinfoseek.co.jp/information/citymap-j.html>

より

HERE
(917) 612-7680

KENNEDY
Fried Chicken
FRIED CHICKEN
MP - FISH - SEAFOOD - STEAK, O' BANI

JURIA
GENERAL MERCHANDISES
T-SHIRTS-HATS-SOCKS
256 WEST 116 ST. 330 646-287-4467

264 WEST 116 ST. CONVENIENCE
BREAKFAST • LUNCH • DINNER
Open 24 Hrs
NEWSPAPERS CIGARETTES CIGARS ATM
CANDY SODA SANDWICHES COFFEE

GOURMET DELI HALAL
Open 24 Hrs
GOURMET DELI HALAL
BREAKFAST • LUNCH • DINNER
CANDY SODA SANDWICHES COFFEE

MASIID AQSA مسجد الأقصى





W 14 St
 Washington Heights
 Upper West Side
 East 116 St &
 Fred Douglass Blvd

M7
M18
M116

FRIDAY
 NEWS
 NEWS



Food Change

URANT

PIZZA KENNEDY
 Eric's Chicken
KENNEDY FRIED CHICKEN
 BUNGER • CTRD • SHRIMP • FISH • SEAFOOD • STEAK & SAUSAGE
 256 WEST 116 ST. 100% HOP BOUND

GENERAL T-SHIRTS





2004.06.25



2004.06.25



2005.01.04



2005.10.22



ハーレムの人種・民族構成と地政学的位置

- ・ハーレムの旧住民であるアフリカ系アメリカ人にとっての対他関係は、どのように意識され語られ実践されるのか。
- ・統計的なデータでも、歴史的事実でも、また抽象的かつ一般的なレベルでの人種でもない、ストリートの日常実践のレベルで、「人種」がどのように経験され、語られ、実践されるのか。
- ・そしてその記述と解釈から、人種差別についてなにが言えるか。

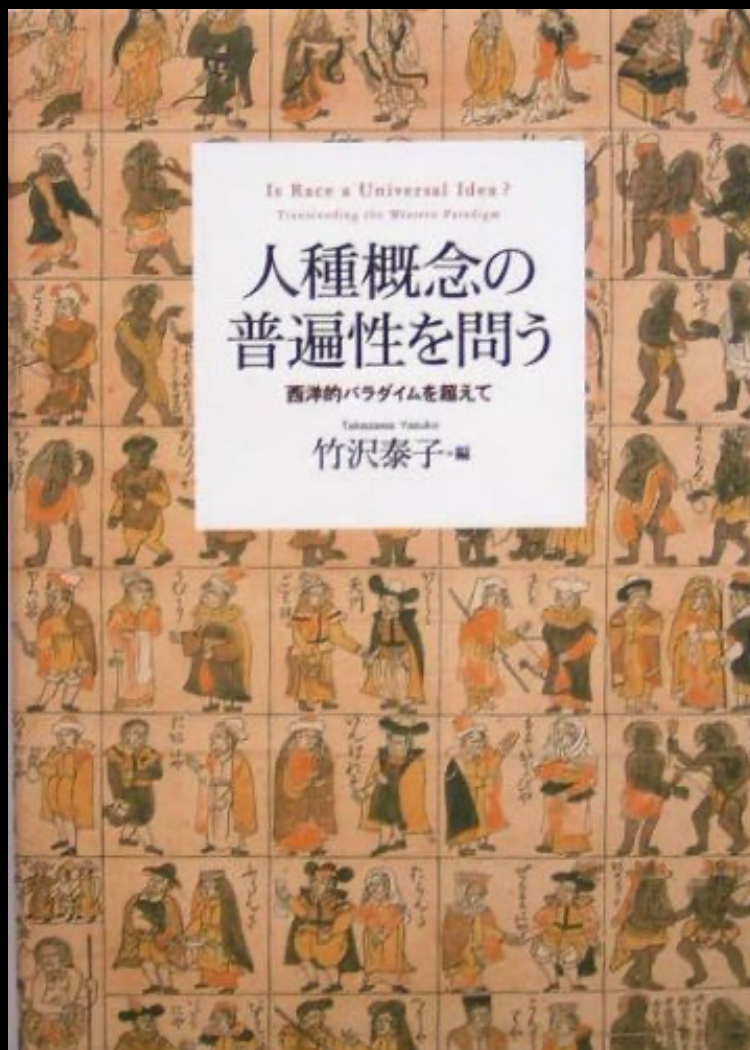
ストリートの人種概念

・フィールドワーク中に遭遇した、床屋、集会場、路上などでのインフォーマルなやり取り。

⇒必ずしも特定の定義をともなって、明確に人種集団への名指しがおこなわれるわけではない。

⇒また、人種の捉え方が一定なわけでもない。

ストリートの人種概念



ストリートの人種概念

Cf. 竹沢泰子編『人種概念の普遍性を問う——西洋的パラダイムを超えて』人文書院、2005年

⇒一般化し普遍化する概念を系譜学的に検討することで、それらに張り付く非意識的前提を問い直す。

例：「Race」と「人種」とを同一視せず、raceの議論にまわりつく「偏り」にメスを入れる。

⇒欧米圏における問いの立てられ方と、日本語圏におけるそれとの差異

ストリートの人種概念

「アカデミア（とくに人文社会科学の）における人種概念」
との対比。

⇒現象と理論のあいだの埋めがたい溝。

⇒「生物学的な現象ではなく、文化的構築物である」という
構築主義的大前提。

しかし、ストリートの身体と心性にとってどのように経験されるか？

⇒確固たる現実としての人種。批評を通じて脱構築可能な文化的構築物としてではなく、論理と感性によって感受され応答可能な生物的・社会的存在（biotic-social entity）。

Cf. ジェイムズ・ボールドウィンとマーガレット・ミードの対話・論争、Rap on Race

ストリートの人種概念

ストリートにおける人種の経験的側面。

⇒3人称の記述だと捉えにくい。

⇒3人称の記述だと人種主義への自らの加担が見えにくい。

⇒2人称に近いところだと接近可能。

Cf. 柳田邦夫『犠牲(サクリファイス)——わが息子・脳死の11日』

Cf. ジャンケレヴィッチ, ウラジーミル (中澤紀雄訳) 『死』。

ストリートの人種概念

・ 経験的なレベルで文化的構築物ではないということ
ことは、路上において人種がつねに不変的であることを意味しない。

・ 人種は、ストリートにおいて、状況に応じて、コンテクストに応じて、それが含む範囲や、記号的強度や、移ろいやすさを変化させる。

Cf. ネイション・オブ・イスラームの「オリジナル・マン」に含まれる範疇。ネイションの開祖マス・ター・ファラード。「黒人」のなかの差異が強調される場合（Cf. アフリカ人、ウェスト・インディーズなど）

Cf. 村田勝幸『アフリカン・ディアスポラのニュー・ヨークー多様性が生み出す人種連帯のかたち』。

ストリートの人種概念

構築主義者は、人種を構築されたものとして捉えることで、あらゆる地域、あらゆるコンテクストでの人種を、かえって一般化し、普遍化し、不変的なものにして本質化してしまったのではないか。

⇒構築主義者は人種主義（者）を、「本質主義的に人種を捉える考え（をする者）」として、本質化してしまった。Cf. Valentine Daniel, *Charred Lullabies*

ストリートの人種概念

「いまだに人種差別が根強く残る」「いまなお人種偏見に満ちている」などの表現が、リベラルな進歩的知識人の口癖だとすると、それはなにを明らかにしているのか。

⇒人種および人種偏見の構築については鋭く批判できるが、人種主義者、人種差別主義者となると、ほとんど変化し得ない「遅れた」「教育のない」「粗野な」者として固定的に描いている。

⇒「人種主義者」が、どのように変化し解体し得るのか、人種主義的な言説や行為が、どのように変化し解体し得るのか、という問い。

ストリートのフィールドワークからの所見

1. アフリカン・アメリカンのムスリムたちによる人種主義のレトリックをともなった強い表現が、必ずしも物理的暴力に結実するわけではない。

⇒『残響のハーレム』2章のアリ。「白人」や「白人アメリカ」と同時に「黒人」や「ハーレムの住民」「ムスリム」にも向けられた不満。

⇒親しくやり取りしてきた多くの人々が、人種や民族のレトリックをつかって、他者化、差別化をはかるが、長期にわたってかれらの実際の行動を見ていくと、差別の対象であるその人物を助けるようなことをしている。

ストリートのフィールドワークからの所見

2. アフリカン・アメリカン・ムスリムにとっての攻撃や揶揄の対象である（話し手による）「奴ら・あいつら・かれらthey」の内実は、必ずしも明白ではなく、また瞬間ごとに（同一のパッセージのなかでも）変化する。「奴ら」の対照軸である「俺たち・わたしたちwe」も、同様に、必ずしも指し示す対象が明白ではなく、瞬間ごとに変化する。

ストリートのフィールドワークからの所見

3. アフリカン・アメリカン・ムスリムたちの暴力的・差別的な語りが暴力へと発展するのを阻む契機がある。

⇒「反暴力のモーメント」「脱暴力のモーメント」とでも呼べそうな場面。3章で描いたアフリカン・アメリカン・ムスリムの当時40代の男性ハミッドによる仲介（仲裁）。6章で描いたアフリカン・アメリカン・ムスリムの当時50代の女性アイシャによるチューター・プログラム。

暴力の二重構造と制度化された暴力

酒井隆史『暴力の哲学』河出書房新社、2004年

- ・ 暴力という概念の内にあるGewalt（権力）の働きとviolence（侵犯）の働き。
- ・ 非暴力にかわる反暴力の試み。

制度化された暴力

Gyanendra Pandey, *Routine Violence: Nations, Fragments, Histories*, Stanford: Stanford University Press, 2006.

- ・残虐であると判断されやすいものと、そうでないもののリスト

⇒そこによこたわるのは、権力の不均衡

- ・ Premodernなもの、residualなものとしての暴力認識

⇒しかし、近代の暴力 = 日常のなかでルーチンとなっており、制度化されている。

修復的アプローチ

しかし、敵対性の反暴力以外にも、反暴力の試みがないだろうか。

⇒メディエーション、修復的司法restorative justiceの試み。

⇒近隣地区や教会・モスクが、そのまま治癒的共同体（Therapeutic Community, TC）となっているケース。cf.坂上香『Lifersライファーズ——終身刑を超えて』（2004年）、坂上香『ライファーズ——罪に向きあう』みすず書房、2012年。

修復的アプローチ

山下英三郎『修復的アプローチとソーシャルワーク』明石書店、2012年

・修復的司法では、犯罪やコンフリクトがあった場合、関係の損傷ととらえ、関係を修復することに主眼が置かれる。

非制度的な修復的アプローチ

国内の先行事例

佐賀バスハイジャック事件 pp.75-76

河野義行さんとオウム真理教 pp.76-77

修復的アプローチ

その他の例：

水俣の「もやい直し」

Cf. 吉本哲郎『地元学をはじめよう』岩波ジュニア新書、2008年

Cf. 緒方正人『熟成版 常世の舟を漕ぎて』SOKEIパブリッシング、2020年

いくつかの理論的検討と課題

佐藤裕『差別論——偏見理論批判』の議論

1) 偏見（差別意識）と差別は同じものではない。

2) 偏見から差別が生まれるわけではない。

3) 差別の主な機能は、排除と「われわれ」意識の形成にある。

⇒ヘイトクライム、直接的な殺人やリンチを説明できるか。

4) 差別に対するワクチンは、差別的行為や差別的制度の指摘や批判によってではなく、それらを無効化する働きをする。より具体的には、差別行為の渦中において行為そのものを馬鹿げたものに見せる。

⇒制度上の差別や大きな暴力をともなう攻撃的差別にどこまで有効か。

⇒差別論と人権論とをわけて考えるやり方は、アメリカの人種問題にどこまで有効か。

いくつかの理論的検討と課題

タラル・アサド『世俗の形成』のなかの「人権で「人間」を救済する」の議論

- ・マルコムXの告発と人権回復の国外への訴え、世俗的言語

- ・キングの道徳的救済と国内の公民権の呼びかけ、ユダヤ=キリスト教的言語

⇒しかし、マルコムの言語は、ストリートの表現でもある。それは闘争の表現であって、その闘争に向き合う相手がいてはじめて成立する。

いくつかの理論的検討と課題

ラル・アサド『世俗の形成』のなかの「人権で
「人間」を救済する」の議論
・『ルシオ・モンド・デ・イプマテキナ
グナに、ジロ「文」り、供
(195-196)。
・『ルシオ・モンド・デ・イプマテキナ
グナに、ジロ「文」り、供
(195-196)。

・『ルシオ・モンド・デ・イプマテキナ
グナに、ジロ「文」り、供
(195-196)。
・『ルシオ・モンド・デ・イプマテキナ
グナに、ジロ「文」り、供
(195-196)。

いくつかの理論的検討と課題

タルル・アサド『世俗の形成』のなかの「人権で「人間」を救済する」の議論

⇒ 選挙と市民主義の仮定する「各党派内市場の市民の等価的価値を、
「性」の価値を、市民主義の仮定する「各党派内市場の市民の等価的価値を、
手なつす実際そのよいうに、社会的に人は救済される。」「で「も済さ
るんらに救済される。」「で「も済さ

⇒ 政治権力と無関係に「人権」の付与もなければ、
「救済」が必要となる。となして捉えなおし、批判的にソシャール・

いくつかの理論的検討と課題

合意形成のモデルを再考する

デヴィッド・グレーバー（片岡大右訳）『民主主義の非西洋起源について——「あいだ」の空間の民主主義』以文社、2020年。

・民主主義は西洋起源の発想ではない。各文化圏の実践のなかにあった。たとえば、異なる者同士がなんとかやっていたかなくてはならない、そのさなかの即興の空間のなか。

・民主主義は代議制とはなんら関係ない。合意形成のプロセスのなかで、多数決（選挙）が効果のあるものとして認識されるためには、決定を強制するための機関（つまりは、暴力を独占する機関としての国家）が前提されていないといけない。

cf. 想田和弘監督『選挙』2007年。

cf. 宮本常一の「村の寄り合い」の記録（『忘れられた日本人』所収）

いくつかの理論的検討と課題

①第一に、法・制度づくりにおいて、社会内の道徳に共鳴する戦略的な言語を選択し、そのうえで少しずつ文法と概念をずらすように仕向けること（cf. 修復的司法、therapeutic jurisprudenceなど）

②第二に、差別や暴力の共犯者となりうるすべての人々に、実際的で地道なワークショップを提供すること（cf. 教育機関や企業を通じて。非暴力コミュニケーション、メディエーターなど）

③第三に、かき消されたり、迅速に処理されたりする、絶望の一手手前にある「叫び」を、それがどれだけ支離滅裂で暴力的であっても聞き取りつつけること

⇒これらの場すべてにテクノロジーとデザイン人類学を導入すること。

ありがとうございました。